

神道学 第百五十七号  
平成五年 五月一日発行  
抜刷

戦後の東京都の神社にみる  
境内建物の高層化について(下)

石井研士

# 戦後の東京都の神社にみる

## 境内建物の高層化について（下）

石 井 研 士

### 高層化の時期

一覧表から明らかかなように、社殿の高層化は近年になってはじめて生じた現象ではない。すでに昭和三〇年代から始まっている。社殿の鉄筋コンクリート化を別にとすると、戦後の神社復興の際に、社殿建築に関して注目を集めたのは、台東区の篠塚稲荷神社が最初であるように思われる。

昭和三五年六月二〇日付の『東神』に「貸しビルで永代維持費」という見出しで篠塚稲荷神社が取り上げられている。この記事によると、篠塚稲荷神社には氏子がわずか百二〇戸しかおらず、神社の維持が困難であったために、境内地四三坪のうち二〇坪を割いて、三階建て貸しビルを建設したという。建設費の一千万円は、半分を氏子から、残りを銀行からの借入によってまかなった。銀行への返済は賃貸料から行い、五年で完済した後は、賃貸料による収入すべてを神社費として、以後いっさい氏子からの集金をしない、とされている。

当時、こうした篠塚稲荷神社の形態や運営のあり方を批判する声が存在したことも『東神』の紙面からうかがうことができる。昭和三五年十一月二〇日付の『東神』には、境内地の半分ほどを売却して兼務社の維持を図ったことに対して「極端に言えばビルの端に神社があるといった格好だ」「本庁では批判的で、神社の土地、森があつて宗教的な雰囲気醸し無言の教化を与えている。例えば蛸が自分の足を食って生きて行くようなものだ」という意見が掲載されている<sup>1)</sup>。

しかしながら、六年後に東京都神社庁設立二〇周年特輯号として刊行された『東神』（昭和四一年六月二〇日）紙上の「二十年のあゆみ」においては、「境内にビルを建てその一部が社殿や社務所になるように設計され、ビルの収入を維持費に当てる、神社経営の新しい面が開拓された」と写真入りで紹介されている。

昭和三〇年代半ばから日本は高度経済成長期へと突入する。高度経済成長は、技術と産業構造の変化による経済変動だけでなく、環境や日本人の生活全般に多大な影響を及ぼした<sup>2)</sup>。東京では著しい人口の流入と東京内部での移動、都市景観の急速な変貌などが伝統的な神社のあり方に対してしだいに影響を及ぼし始めていた。篠塚稲荷神社に対する評価の変化は、変動期におかれた東京の神社のあり方の模索を示しているとも見られるであろう。そしてそれはたんに社殿の形態や運営の変化という表面上の問題ではなく、神社の総体に及ぶものであったと考える。

篠塚稲荷神社の事例は、社殿自体が高層化により伝統的な様式を大きく逸脱したものではなかった。分類からいえば、境内地に貸ビルを建てたことになるが、四〇坪ほどの境内地に二〇坪の三階建て貸ビルの建築は、結果として社殿の宗教的意味を変容させたことは確かである。本論で社務所をはじめとした本殿以外の社殿の高層化を問題にしているのは正しくこの点にある<sup>3)</sup>。

私のいう意味での社殿の高層化は、昭和三〇年代から始まっているが、社殿の高層化はまず第一に、戦災による震災からの復興と密接に関係している。前述したように、昭和三〇年代の半ば以降に震災神社はつぎつぎと復興されていく。社殿の再建が高層化の契機の一つであったことは間違いないだろう。

第二に、神社を取り巻く環境がこの時期大きく変化したことを挙げることができる。東京においても地域差があり、一律にビル化が進行したとはいえないが、周囲の高層化が神社自体の高層化を促したことは事実である。昭和三七年二月二〇日付の『東神』には、「ビルの谷間に沈む神社―高層建築の乱立は神社建築に変革を及ぼすか」という記事が掲載されている。当時東京で著しかったビルラッシュに対して「かつては火事に悩まされたが、これからはビルと対決しなければならぬ運命となった」と記されている。すでにビルの谷間に埋もれる神社が現れ、「神社界にとっ

ても今後十年を待たずして切実な問題の一つとなろう」と予測している。そしてこの予見通り、四〇年代になって高層化する社殿の数は急速に増加していく。

しかしながら、注意しておきたいのは、高層化は全体として見ればあくまで一部の神社にとどまっている。けっして主流を占めているわけではない。ビルの谷間に沈んだ神社の建築は「周囲の環境の如何にかかわらず旧来の様式を固持して行くべきなのか、それとも周囲の環境に適應するべく高層建築に切換えるべきなのか」（昭和三七年二月二〇日付『東神』）という選択に対して、後者を選ぶ神社が一部で現れた、ということであって、神社界がこぞって高層化に進んだということではない。

昭和五〇年代になって、御嶽神社や八官神社、あるいは朝日稲荷神社といった本格的にビル化した神社建築の時代を迎えることになる。換言すれば、「ビル」という点で建築の承認をめぐって大きな問題となった八官神社の前史として、数多くの事例が存在したわけであり、八官神社の事例はけっして突然生じたということではない。あくまでもこうした事例の流れの上起こった出来事と考えることができる。そして、これらビルになった神社の延長線上に、現在生じている大規模な境内地の模様替えを含んだ社殿の高層化という現象が生じていることになる。

「社務所」と「本殿」に関して、事例を挙げながら社殿の高層化の経緯と問題点を考えることにしたい。

## 社務所

区内ではじめて社務所の高層化を行ったのは、昭和三六年の台東区の須賀神社である。須賀神社は昭和二〇年二月に戦災によりコンクリート造りの本殿を除いて他の社殿を焼失した。社殿の復興を報じた『東神』（昭和三六年一〇月二〇日付、三六年十一月二〇日付）の記事によると、社務所の高層化の理由は二つである。ひとつは、境内地が二一〇坪と狭いために敷地を節約するため、そしていまひとつは、周囲の環境との調和を考慮したためである。須賀神社の周囲にはビルが建ち並び、昭和三六年当時境内はビルの谷底で日が当たらなくなったとされている。それゆえに「建

物はどうしても上に伸びなければならぬので三階建の建物となった」（『東神』昭和三六年一月二〇日）。

建物の構造は、一階に受付事務室、二階広間、三階宮司居室とされている。完成した社務所は、「箱型そのままの建物であるが、あたり近所がビル街だけにピタリと時処位を得ている」（『東神』昭和三七年七月二〇日）と評価されている。

『東神』によれば、昭和三六年当時は神社界でも社務所や参集殿の新築が相次ぎ建築ブームであった。<sup>1)</sup> 別表神社を中心に社務所の大型化が進行していた。しかしながら、建築様式を見ると木造が大多数を占めており、鉄筋コンクリート造りの社務所は珍しい。

社務所の高層化の事例を追っていくと、境内地の空間的な有効利用を考えようとするかなり明確な意志をうかがうことができる。社務所の形態そのものに関しては、本殿と異なり構造上の制約ははるかに緩やかであり、少なくとも境内地の雰囲気や景観を大きく壊さないかぎりは、一般的に認められるのではないかと考えられる。しかしながら、いったん高層化による空間的効率的利用が適応されると、そこには宗教上の理由による利用だけでなく、神社の経済的運営的な意味での効率よい利用も含まれていくことになる。社務所は社殿の中でも最も世俗的利用に供されやすい建築物であるかもしれない。

昭和三九年に大田区の鷲神社は会館兼用の社務所を地上三階地下一階で建築する。鷲神社の境内地は須賀神社とほぼ同じ二〇〇坪である。豊島区の妙義神社は昭和四一年一月二月に鉄筋コンクリート造り三階建の社務所を建築した。すでに崖面を利用して地下駐車場を設けていたが、その上に社務所を建築したものである（『東神』昭和四一年一月二〇日）。杉並区の氷川神社では昭和四五年に地下駐車場を設けた社務所を設けた（『東神』四五年九月二〇日、昭和四六年一月二〇日、昭和四六年一月二〇日）。述べ二八七坪で駐車場は一一台駐車可とされている（『東神』昭和四六年四月二〇日）。中央区の白旗稻荷神社では、昭和四六年に鉄筋コンクリート造りの地上四階の社務所を建築した（『東神』昭和四九年六月二〇日、『東神』昭和五二年一月二〇日）。

境内地の形態を巧みに利用した社務所も現れるようになってきている。こうした形態は、鉄筋コンクリート建築であるからこそ可能になっていることと、有効利用に対する積極的選択を見ることができよう。品川区の雉神社の社務所は国道一号線との段差を利用して、三階建となっているが、社殿の側からみると一階部分しか見えないように工夫がされている（『東神』昭和四七年二月二〇日）。渋谷区の代々木八幡神社も、境内の西の崖地を利用して三階建てで建築されている。一階が倉庫・ガレージ、二階職舎・祭器庫・禊場、三階に講堂と事務室が設けられている（『東神』昭和四六年二月二〇日、昭和四六・一〇月二〇日）。

すでに駐車場を併設することで、社務所の収益化が進んでいると考えることができるが、本来神社の事務所を扱う社務所はこうした傾向をもちやすいものであったのかもしれない。とくに新宿区の水稲荷神社のように飛地境内の場合には、一階部分に社務所を設けながら、二階から五階までは賃貸住宅、という形態はそれほど奇異ではないのかもされない（『東神』昭和四九年二月二〇日、昭和五〇年五月二〇日）。社務所の高層化の事例は一覧表にあるように他にも見られる。近年にいたればいたるほど、ビルの階数は高くなり、社務所の複合的な利用が図られるようになってきている。

### 本殿にみる形態の変化

『東神』、『東京都神社名鑑』およびこれまでの調査から明らかになった、本殿の高層化に関する最も早い事例は、大田区の馬込八幡神社である。馬込八幡神社は昭和二〇年の震災により社殿を焼失しており、三五年に造営が完成された。本拝殿とともに鉄筋コンクリートの入母屋権現造で約三五坪である。三五坪の社殿の下全部が地下室になっている。厳密にいえば、本殿は直接地面にはつながっていないことになる。『東神』（昭和三五年九月二〇日）によれば、祭事その他のための付属施設として利用しており、「今後鉄筋コンクリートの社殿を建築なさる宮司さんには参考になるう」と記されている。馬込八幡神社の境内地は五六八坪あり、境内地の狹隘さゆえに社殿の地下の利用を図ったのではなく、鉄筋コンクリート造りという社殿の建築が地下の利用を可能にしたものと考えていいだろう。利用の形態

ではなく、鉄筋コンクリート造りという社殿の建築が地下の利用を可能にしたものと考えていいだろう。利用の形態も、神社本来の目的にかなっており、それゆえに「参考になろう」という評価が出てくることになるものと考えられる。

社殿の地下利用を考える神社はその後もかなりの数現れている。昭和三十七年に復興の第一期工事として社殿が再建された王子神社において、権現造の社殿百坪のうち六〇坪が地下室として利用された（『東神』昭和三十七年五月二〇日、『東京都神社名鑑』五八一頁）。また同年新宿の穴八幡神社が、戦災により焼失した社殿の復興のために、約四〇坪の本殿を造営し、一階部分を御神庫として利用した事例がある（『東神』昭和三十八年一月二〇日、『東京都神社名鑑』五三五頁）。以上の事例はどれも、建築上物理的には神殿と地面は直接大地につながっていない。しかしながら、利用の形態からいえば、直接大地と連続していないとしても、空間的には同質の宗教的空間と考えてよいだろう。後述するように、社殿の一部に貸ビルを建てたりするなどの場合に批判があった点を考えると、上記のような本殿地下の利用はまったく問題がなかったといっていいただろう。

### 芝大神宮の事例

#### 改築にいたった経緯と理由

本殿の地階利用において一石を投じたのは港区の芝大神宮である。

芝大神宮の社殿は昭和二〇年四月の空襲で一切を焼失した。昭和三〇年頃までに氏子は疎開地や戦地から帰ってきたが、戦後の動乱期で復興費用を捻出することができなかった。昭和二四年に仮社殿と社務所を建築し、二千坪の境内地の一部を宅地として貸した。昭和三四年に復興奉賛会を結成し社殿の復興を目指したが、それでも神社の維持運営は困難であった。芝大神宮の氏子区域は、新橋、浜松町、麻布、芝公園、海岸等の三〇ヶ町であるが、すでにその頃から氏子が減少していた。そこで将来の神社の経営基盤の確立を目的にして、昭和三九年に、社殿の建っていた境

内地を更地にし、一階屋上に本殿をはじめとした社殿を設け、一階部分は五〇台収容可能な駐車場を付設した。東京都におけるドーナツ化は、昭和三〇年代の半ばから千代田区、中央区、港区で始まっている。住民基本台帳による住民数が前年を下回るようになってきている。あるいは社殿復興費用の負担をいやがる氏子が現れるなど、氏子の質的変化が生じ、神社を維持していくための経済的基盤がかなり不安定になっていったことが、駐車場の経営に走らせたことになる。

### 建物の構造

現在芝大神宮の本殿は一階の屋上部分に配置されている。従来の社殿がもともと土盛りをして、通常の高さよりは高い地点に社殿があったため、新しい社殿にはそれほど違和感がなかったという。幅の広い石段が本殿のある屋上部分へと通じている。石段の入口には巨大なコンクリート造りの鳥居が立っている。社殿の周囲には土が入れられ、普通の境内と変わらないように木々が植えられている。正面から見る限りでは駐車場があるかどうかはまったくわからないように工夫されている。社殿の下ほとんどすべてが駐車スペースになっているにも関わらず、参拝者には車の出入りはわからず、車の音は聞こえない。参拝者が社殿に参る空間と、駐車をするために車が通る空間とは完全に分離されている。

一階部分の大半は駐車スペースに当てられている。社殿の裏が通りに面しており、駐車場の入口はその通りに向かって開かれている。建築に関しては関係機関からさまざまな問い合わせがあったという。とくにご神体の下をどうするかには十分留意して建てられた。延喜式の祝詞にある「高天原に千木高知り底津石根に宮柱太敷立て」に従って、社殿の下の部分を囲み砂を入れ、駐車スペースとすることを避けた。芝大神宮が二階部分に社殿を設けた時点では、神社本庁の高層化に関する通達（昭和四五年）は出ていない。しかしながら結果的には、芝大神宮は通達の基準に従った。

また、芝大神宮は、社殿を取り巻く環境にも配慮を払っている。社殿と同じ高さのスペースには樹木が植えられて

また、芝大神宮は、社殿を取り巻く環境にも配慮を払っている。社殿と同じ高さのスペースには樹木が植えられており、社殿の正面からの広く大きな階段とともに、こうしたことが建物の屋上であることを忘れさせている。しかしながら、実際には樹木は植木鉢と同じ構造になっており、巨大な樹木になることはない。

芝大神宮の高層化は、いくつかの点で画期的な出来事であったと考えることができる。第一には、由緒ある本務社が、大地につながっているとはいえず、建物の屋上部分に設けられたこと。第二には、社殿が屋上に昇ることによって生じた空間を、宗教的な目的で利用するのではなく、将来の神社運営や経済的基盤をにらんで、収益事業のためのスペースとしたこと。そして第三には建物の規模が大きかったことである。

芝大神宮を報じた『東神』（昭和四一年六月二〇日）には「一階を駐車場とし屋上に社殿を建てる。都心の神社の一例として芝大神宮が完成した」と写真入りで記されている。由緒ある本務社が屋上部分に建築されたことは、画期的であったといってもいいだろう。『東京都神社庁設立二十周年特輯号』の『東神』（昭和四一年六月二〇日）では芝大神宮の写真が「二十年のあゆみ」の「昭和37年〜昭和38年」の部分で取り上げられている。わずかな頁数の中で写真入りで取り上げられたことは、いかに東京都の神社界において重大な事件であったかを知り手がかりになると考えられる。<sup>5)</sup>

### 小規模神社の高層化

昭和四一年に墨田区の永倉稲荷神社は、一階屋上部分に社殿を設けた。永倉稲荷神社はJR錦糸町駅の傍らのガード沿いに立地しており、一七坪と狭いために敷地に集会場を建設し、その屋上部分に神社を設けたのである。永倉稲荷神社は兼務社で町会で世話をしている神社であり、『東神』（昭和四一年三月二〇日）には、「小境内の神社の建て方として一つの方向を示したものである」と記されている。

実際、境内地が狭小な神社、とくに兼務社においてはこうした建築様式をとるものが他にもつきつきに現れていっ

た。台東区の日枝神社（昭和四三年）、品川区の誕生稲荷神社（昭和四四年）、中央区の今村幸稲荷神社（昭和四四年）、台東区の三島神社（昭和四七年）、中央区の巳福德神社（昭和四八年）、葛飾区の於玉稲荷神社などがある。これら神社はどれも小規模なものではあるが、次々に本殿が二階へと昇っていったことは、以後の大規模なビル化への、少なくとも心理的な橋渡しにはなったものと考えられる。

## 御嶽神社

### ビル化の経緯と理由

神社のビル化という場合に、代表的な事例としてしばしば取り上げられるのは中央区銀座の八官神社であるが、本格的なビル建設を行ったのは御嶽神社が最初である。

御嶽神社はJR渋谷駅から歩いて数分の距離にある。戦災による被災によって社殿が焼失した。戦後まもなく仮社殿は建ったものの、渋谷の発展にもなって氏子は他所へと移転し急減していった。そのため、仮社殿の本建築はおろか、維持自体も困難になっていった。かつて企業からビルにして屋上に社殿を載せないかという話があったが、高いビルの屋上に遷座したり、企業にビルを貸すつもりはなかったという。

昭和五〇年頃から、当時の渋谷区長との間で話しが生じ、渋谷区の商工会議所と同居する形でビルを建設することになった。渋谷区で商工会議所の用地を捜していたが、駅周辺で広くかつ安い土地が見つからなかった。本建築したいという神社側の意向と駅周辺に商工会議所を建てたいという渋谷区側の利害が一致して、ビルを建設することになったのである。

### 現在の構造

御嶽神社のビルは、二階建ての部分と七階建ての部分からなっている。宮益坂に面して参道と石段が設けられており、社殿のある二階屋上部分までまっすぐに石段が通じている。昇りきると、正面に本殿、正面左に社務所があり、

正面の右側部分は七階建てとなつてゐる。かつて高台にあつた御嶽神社の姿を、ビルの屋上に移つたとはいつても、できる限り保持しようとする意図を見ることが出来る。

御嶽神社は神社周辺のごく一部の地域の氏神であり、現在当地に住んでいる氏子は一家族のみである。他は郊外へ出たり、かつ亡くなつてしまつた人も多いという。氏子区域に建つたビルの店子や企業はかつての氏子のような活動はしない。神社を支える母体は大きく変化し、現在では神社が自ら経済的な基盤を構築しなければやつていけないまになつてゐる。昭和五五年のビル化により、御嶽神社は明確な経済的基盤を確立したということが出来る。かつての荒れ果てた状態と異なり、きれいに整理された境内地には多くの参拝者がくるようになった。〇Lがお弁当を広げて昼食をとるなど、公園と同じように人がいる。昔から御嶽神社では酉の市が開かれていたが、社殿が新築されてから復興され、多くの参拝者で賑わうようになった。

## 八官神社の事例

### ビル化の経緯と理由<sup>⑧</sup>

昭和三〇年代の銀座のビル化は、周囲から氏子を追い出すとともに神社を取り巻く環境を著しく悪化させていった。こうした中で老朽化した社殿の修復やお祭りにかかる費用の捻出のために、宮司は特許庁に勤め、退職後は神社で特許事務所を開いた。それでも氏子は減少していき、四世帯にまで減少した。しかも四世帯とも銀座には職場に通うだけで住んではいなかった。退職した宮司を継いだ若い宮司は、氏子組織が崩壊した中で、老朽化した社殿を復興し維持していくためには、神社自らが利益を生み出すしかないと考えた。神社をビル化することはまさしく銀座という地になつたことであり、賃貸料による収入は永続的に安定した経済的基盤を確立するものだと考えたのである。さらに、八官神社にとってのビル化は、新しい布教・教化の模索と新しい神社の可能性をも開くものと考えられていたのである。

## 現在の構造

八官ビルはまったくの箱型のビルである。外堀通りに面した部分を二階まで打ち抜き拜殿とした。御神体は最上階の八階に鎮座している。本殿が大地につながっているという要件を満たすために、地下からパイプを本殿まで貫通させている。このパイプは「神の御柱」といわれ、一階の拜殿で拝めば、中空のパイプを通して神に願いが届くという仕掛けにもなっている。一階の拜殿は、一階フロアーの半分を占めているに過ぎず、残りには店舗が入っている。本殿に参るためにはエレベーターを利用して最上階の八階へ行く。本殿の下部には地面とつながるパイプを見ることが出来る。社務所は二階に設けられている。ビルの地階、一階、三階から七階までには貸店舗が入っている。貸店舗には料亭やバーも含まれている。

ビル化当時、ビル同様に組織形態や活動も都市に適応したものにしようとし、組織を祭儀部、事業部1、事業部2の三部門に分割した。祭儀部は神社本来の宗教活動を担当する部門で、新年祈禱、出張節分念祭、四月の新年度目標達成願祭など、都会的ならではの祭事を作り上げていった。事業部1はビル内での事業、テナント業を担当し、事業部2は八官企画として八官神社を越えた事業体を目指した。こうした企業行為は、神社の行う収益事業というよりは、中央に位置する小規模な神社から同じく小規模な地方の神社への有用な情報と物を提供することに目的があったとされる。

ビルになった神社には、以前に比べて多くの参拝者が参るようになった。工夫を凝らした祭儀が銀座という土地柄に根づいていった。しかしながら、ビルになることによって日曜・祭日は休みとなり拜殿はシャッターで閉められるなど、伝統的な神社のあり方と活動自体が変化したことも確かであった。神社は平日でも朝一〇時を過ぎないとシャッターは開かない。早朝の参拝も不可能である。ビル化することで、経済的な安定と新しい活動内容を持つにいたったが、同時にビル化はかつての氏神としての八官神社の内容そのものを変容させることになったのである。

## 朝日稲荷神社の事例<sup>1)</sup>

### ビル化の経緯と理由

町内の守護神として町会を母体に祀られていた朝日稲荷神社は、昭和二〇年に戦災のため社殿を焼失した。戦後社殿を再建し、昭和二七年宗教法人朝日稲荷神社となった。朝日稲荷神社のビル化は、八官神社と異なり、朝日稲荷神社側から積極的に計画し実行されたものではない。ビル化の契機は、隣接する大広ビルの新築によってもたらされた。昭和五八年に広告代理店の大広から、朝日稲荷神社に対して、共同ビル建築の話が持ちかけられた。朝日稲荷神社の敷地一五坪を建築敷地に加えることによって、八階建てのビル建設が可能になるためである。ビル化に関してはすでに八官神社の前例が存在し、承認をめぐって複雑な経緯を経ることになった。

朝日稲荷神社がビル化のために示した理由は以下のような四点である。第一に、町内崇敬者が減少したために神社の維持管理が困難である。銀座では昭和三〇年代にビルラッシュを迎え、住人は郊外へと移転していった。昭和三九年には駐車場経営によって収入を得たが、維持していくためには不十分であった。ビル化による賃貸料収入は不安定な財政基盤を十分に安定させるものであった。神社が指摘する第二の理由は、銀座の町並みは日々変わりつつあるのであって、旧態以前の古い形にこだわる必要はない、というものである。崇敬者の気持ちを体して、道路に面した部分に拝殿が設けられ、屋上に移された本殿にも参拝ができるのであれば、ビルでもよいのではないかというのが崇敬会の考え方であった。第三には、銀座地区には浮浪者や不敬の徒も多く、神社の境内が昼夜の別なくそうした人々の安息場所になっており、神社の尊厳維持が困難である。そして第四に、株式会社大広からの共同ビル建築の申し出があり、条件の面で折り合えたというものである。

神社本庁との間で、神社の建築様式をめぐって交渉がもたれたが、最終的には神社側の主張する形態のビルとなった。昭和五九年にビルは完成した。

## 現在の構造

大広朝日ビルの一階部分の一部が二階部分まで四角く切り取られ、ほぼかつて社殿のあった場所と同じ所に、道路に面して拝殿が設けられている。本殿は八階の屋上に鎮座されている。本殿に参るときにはエレベーターを利用して最上階の八階へ行き、さらに外階段を屋上まで昇ることになる。外形上は、先に述べた八官神社とよく似た形態をとるようになった。

ビル化されるに際しては、崇敬会が実に木目細やかな配慮を払っている。拝殿の屋根にあたる2階部分は空色に塗られ、外側に向かって緩やかな傾斜がつけられている。拝殿からビルの外壁を伝ってパイプが通され、参拝者の拍手の音が屋上の本殿に届くようになっていいる。本殿の置かれた屋上も木々が植え込まれ、参道がつけられるなど、実際の地面の上に建てられているかのような錯覚さえ起こさせる。

朝日稲荷神社は、ビルとなってから賽銭が著しく増加した。これは明らかに、参拝者が増加したことを意味している。道に面して立てられた瀟洒な拝殿に対して、人々が奇異な感情を抱くことはないようだ。

## 高層化の原因

なぜ社殿は高層化されなければならないのか。明確は解答を得るためには、個別の事例を詳細に検討しながら積み上げていく作業が必要となる。ここではこれまでに得られた資料と分析からいくつかの点を指摘するにとどめたい。

すでに述べたように、私のいう意味での社殿の高層化は、昭和三〇年代から始まっている。これはまず第一に、戦災による震災からの復興と密接に関係している。社殿の再建が高層化の契機の一つであったことは間違いないだろう。第二に、減少する氏子によって生じた経済的基盤の弱体化を補う目的を考えることができる。これは必ずしも消極的な意味だけではなく、経済的基盤の安定による神社の永続的な維持が考えられている。第三には、神社を取り巻く環境の変化を考えることができる。ビルの谷底に沈むことへの対応としてビル化を考えることができる。そして第

四に、神社建築の様式が木造から鉄筋コンクリートへと移行したことが、高層化の一因であることも指摘できるだろう。建築上不可能になったことが、他の要因による影響を吸収しえたということができる。第五として、空間の合理的利用という考え方の浸透、第六として、新しい教化や神社の模索を考えることができる。

これらの理由は、程度の差こそあれ東京の戦後の都市化と関係するものである。焼け跡からの経済発展による再建は、日本の都市化の大きな特徴であるし、鉄筋コンクリート造りへの移行は、関東大震災や戦災の教訓に立ち、また技術的な問題でもあるとしても、建築にかかる行政上の制約は都市化と関係があると考えていいだろう。新たな神社像の模索も都市においての対応と理解することができる。

上記のような理由は、基本的に東京の神社全体に関わるものであるとしても、地域的な偏差が存在する。一覽表に示した高層建築を区ごとに分類すると、明らかに都心の、人口が流出したドーナツ化の進んだ区に多くなっていることがわかる。

## おわりに

社殿の高層化の事例を見ていくと、神社界がさまざまな個別の事例を経験していくことによって、高層化に関するある種のコンセンサスが形成されてきたように思える。つまり、本殿をはじめとした伝統的な社殿の建築様式や境内の尊厳が都市化によって壊され、神社の基盤をなす信者集団が弱体化した時に、神社がどのような形態をとることができるかに関する共通認識が、個々の事例と周囲の反応を踏まえてでき上がっていったと考えることができるのである。その共通認識とは、本殿は伝統的な様式を遵守することが望ましい、しかし社務所をはじめとした他の社殿は高層化は可能である、というものではなかっただろうか。そしてどうしても高層化しなければならないときには、原型をとどめるような工夫を施そうとする意志がうかがわれる。もちろん、上記の例で見てきたように、小規模な神社が

本殿を屋上部分に載せることはある。しかしながら、それはけっして望ましいことではなく、やむを得ない処置である。

本殿の伝統的様式の継承と社務所の高層化という傾向は、わたしが平成四年に行ったアンケート調査からも指摘することができる。今後も社殿の高層化が進むのかどうかも考慮しながら、アンケートの調査結果を見ることにしたい。

#### 東京都本務社アンケート調査の結果から

「氏子から境内にビルを建てることを勧められたことがありますか」という質問に対する肯定回答をみると「社務所」が一・三・四パーセント、「本殿」が二・二パーセントとなっている。また「建設業者から境内にビルを建てることを勧められたことがありますか」という質問に対しては、「社務所」が一・二・六パーセント、「本殿」が一・二・六パーセントとなっていて、両者の間に大きな開きのあることがわかる。

実際に社殿の高層化の可能性があるかどうかについても（あなたの神社に、今後10年以内に、社殿や社務所、あるいは会館や貸ビルが建つ可能性はどれくらいあるでしょうか）、本殿が一・一パーセントであるのに対して、社務所では一・六・四パーセントとなっている。

さらに、社殿を高層化した場合に氏子や総代がどのような態度をとるかを聞いた質問には、本殿に関する肯定的見解がわずかに七・八パーセントであるのに対して、社務所では二・三・一パーセントと全体の四分の一近くまで達している。「もし自分の神社の場合であれば」という質問ではなく、他の神社の場合を想定すると、「社務所の高層化が進む」とする回答は五二・〇パーセントという高率になる。

以上のようなアンケートの結果と、いっそう進む東京都の都市化を考慮すると、社殿の高層化はますます進行するものと予想することができる。そして現在、かなり高層の社務所の建築と、それに伴う境内の大規模な模様替えが生じている。こうした大規模な模様替えは東京における社殿の高層化に関するある種の淘汰と考えることができるが、その一方で、境内の社殿を含めた構成自体についてはほとんど意が注がれてこなかった。その結果、本殿の高層化を

その一方で、境内の社殿を含めた構成自体についてはほとんど意が注がれてこなかった。その結果、本殿の高層化を避けつつ、財政基盤の確立を目的とした高層化を行うために、聖なる空間としての境内地の構成とあり方は大きく伝統的様式とは異なることになった。

註(1) 篠塚稲荷神社への意見は「進展するマンモス都市の中にある神社経営の諸問題(座談会)」の中で述べられたものである。

(2) 高度経済成長の理念とその影響に関しては、佐和隆光『高度成長——「理念」と政策の同時代史』日本放送出版協会、昭和五九年、高度経済成長を考える会編『高度成長と日本人——PART1個人編 誕生から死ぬまでの物語』日本エディタースクール出版部、昭和六〇年、同『高度成長と日本人——PART2家庭編 家族の生活の物語』昭和六〇年、同『高度成長と日本人——PART3社会編 列島の営みと風景』昭和六一年を参照。

(3) いまひとつ篠塚稲荷神社の事例で注目すべき点は、経営基盤の移動の問題である。神社維持のためとはいえ、当時の東京の神社界にかなりのショックを与えたことは事実と考えてよさそうである。神社自体が氏子の減少により、自ら維持するための経済的基盤を確立しなければならなくなった。都市化による神社運営の変化については、あらためて論じてみたい。

(4) 「最近の社務所建築——坪数は百坪前後に大型化」昭和三六年一月二〇日。

(5) 昭和三五年二月二〇日付の『東神』には「芝大神宮の駐車場はガラガラで役にたたぬと思われがちだが夜は一杯で大変な騒ぎ」という記事が掲載されている。こうしたことが記事になること自体が当時の関心の高さを物語っているものと考ええることができる。

(6) 八官神社に関しては、拙稿「都市化と神社——銀座八官神社の事例から」『神道宗教』第一三〇号、昭和六三年参照。

(7) 朝日稲荷神社に関しては、拙稿「都市化と神社——銀座朝日稲荷神社の事例から」『東京大学宗教学年報Ⅶ』昭和六五年参照。

(8) アンケート調査は東京都下の本務神社三九六社を対象に平成四年九月に行った。回収率は七四・五パーセントである。

(9) 「氏子から境内にビルを建ててくれることを勧められたことがありますか」

社務所を組み込んだビル

2 本殿を組み込んだビル

ある	三六(一三四)	ある	六(二二)
ない	三三(七六)	ない	三三(八三)
不明	三(七)	不明	四(一五)
合計	三九(一〇〇)	合計	三九(一〇〇)

「建設業者から境内にビルを建てることを勧められたことがありますか」

1 社務所を組み込んだビル	2 本殿を組み込んだビル
ある	ある
三(二六)	七(二六)
ない	ない
三(九六)	一〇(七七)
不明	不明
三(七)	五(一九)
合計	合計
三九(一〇〇)	三九(一〇〇)

(10) 可能性が「かなり高い」「あるかもしれない」の合計のパーセント。

本殿を組み込んだビル	社務所を組み込んだビル
かなり高い	かなり高い
三(一一)	一五(五六)
あるかもしれない	あるかもしれない
五(一九)	二九(一〇六)
ほとんどない	ほとんどない
三(二三)	三(二三)
まったくない	まったくない
一六(三六)	一四(四九)
わからない	わからない
六(二二)	一(四)
不明	不明
三(一九)	四(一六)
合計	合計
三九(一〇〇)	三九(一〇〇)

(11) パーセントは「賛成する者が多い」と「大多数が賛成する」の合計のパーセント

「様々な理由から社務所や社殿をビル化しようと考えたときに、氏子や総代はどの様な態度をとると思いますか」

△本殿の場合▽

△社務所の場合▽

△本殿の場合▽

1	大多数が反対する	一五(五.四)
2	どちらかといえば反対	二六(九.七)
3	意見が割れる	一八(六.七)
4	賛成する者が多い	一七(六.三)
5	大多数が賛成する	四(一.五)
6	わからない	一九(七.二)
	不明	二八(一〇.四)
	合計	二六(一〇.〇)

(12) 社務所の高層化が進む

	はい	一四(五.〇)
	いいえ	三(一.二)
	わからない	七九(二九.四)
	不明	一八(六.七)
	合計	二六(一〇.〇)

△社務所の場合▽

1	大多数が反対する	八(三.一)
2	反対するものが多い	三(一.四)
3	意見が割れる	四(一.五)
4	賛成する者が多い	五(一.九)
5	大多数が賛成する	二(四.一)
6	わからない	三(七.八)
	不明	二六(九.七)
	合計	二六(一〇.〇)